

Jude the Obscure における 霊と死のイメージ群： 精神と身体の相克

谷 山 智 彦

序 論

Jude the Obscure (1895) は Thomas Hardy の最後の小説であり、この作品は19世紀末に出現した純真、貞淑、男性社会に対する従順を旨とするヴィクトリア朝的な女性の規範に反抗する「新しい女性」の姿を描いた作品の一つとしても知られている。この作品においては Sue Bridehead がそのような型の女性に該当し、彼女は既存の結婚制度や家族関係、男性との関係性に疑念を持ち、これに挑戦的な行動を起こすのである。

この物語は Sue のような女性を描いた物語であると同時に、彼女に共鳴するこの Jude Fawley という男の野望と挫折の物語でもある。彼は大学での高等教育の享受とそれによる成功を求めて、苦心する。しかし、その過程において、彼の最大の障害となるものが、彼を巡る女性達との性関係や結婚といった問題である。

作中で、Jude はもう一人の女性の主要な女性キャラクターである Arabella に対して抑えがたい情欲を覚え、衝動的に性関係を持つ。その結果として、大学への情熱は冷めてしまうのである。そうした軽率な行為の結果、迫られた結婚関係が彼を苦悩させる。彼は、これを契機として、こうした軽率な婚姻をもたらした自身の身体の内にある性的情念に強い悔恨の念や複雑な感情を抱き、苦悩、葛藤していくことになる。そして、そうした情念と葛藤ゆえ

に、婚姻や女性の在り方に対して急進的な思想を持つ Sue と共感し、共に生きることになるのである。

彼が惹かれる Sue もまた、Jude と同じように肉体関係や性の問題がその人生を狂わせる障害となり、受難の原因となっている。彼女は、前述したように男性と同等の知性や権利を求めようとする。しかし、そうした試みは、彼女が女性であるが故に、社会的に受容されることはない。彼女は常に男性から身体的な情念の対象として、視線を投げかけられ、それに応じることを社会的に要請される。彼女は女性という男性とは異なる身体と性を持つために、常にこうしたものに囲い込まれ、自身の願望や信念を貫くことが困難なものとなるのである。彼女もまたその苦悩や葛藤の原因に身体とその内にある性的な情念がある。故に、共通の苦悩と葛藤を抱える二人は、互いに惹き合いながら、性と身体的情念に関して葛藤し続ける。そして、こうしたものを超越した新たな絆や情愛の関係を模索しようとするのである。

このような苦悩と葛藤を経験する主人公の Jude、そして Sue の 2 人の周辺に“phantom”, “specter”, “deity”, あるいは“dead man”といった身体を持たない精霊や亡霊、死者などのイメージや自殺的な行動や死を想起し、関係付けられる描写や行動が数多く現れる。これらは、苦悩する彼らの精神の深層を垣間見ることが出来る重要な象徴的描写であり、その精神的な姿勢の意義を読み取ることができる表象である。本稿では、こうした霊と死という彼らの周辺に出現する描写に着目し、性的情念や身体、婚姻に関して強烈な葛藤と苦悩を経験する主人公 Jude と Sue の精神に迫る。

この考察に当たり、3つの節に分けて、Sue と Jude の内面と表象に関して検討する。最初に、上記の特徴的な描写に着目しながら、彼が Sue との出会いと共感以前に出会い、彼の人格と人生に大きく影響を与えた Phillotson との関係を考察し、物語で苦悩を経験する彼の基礎的な精神的志向が如何なるものであったかを考察する。そして、それに続く 2 節目においても Phillotson の存在を交えて、Jude と Sue の関係性の中での彼らの性に関する意識や感情に着目する。その中での彼らの性が如何に自覚、認識され、苦

悩が発生してくるのかを検討する。そして、最後に、苦悩と葛藤の人生の中で得た Jude と Sue の二人の性に関する意識や思想と当時の社会との対立に目を向け、彼らが最終的に至った性に関する意識や思想は如何なる社会的意義をもっていたのか、それを踏まえて、彼らの周辺の死や霊の描写は如何なる意味を持ってくるのか、そしてこうした人物が描かれる作品自体の意義を検討する。

1. Jude Fawley と Richard Phillotson

この物語は、Jude の故郷 Marygreen から、教師 Phillotson が旅立つところから始まる。作品研究において、重要な位置を持つ存在は、勿論、彼と結婚や性関係を持つことになる Sue と Arabella の二人の女性であると言えるのだが、彼女らと同等に重要な位置を Richard Phillotson は占めている。Phillotson は後に、Sue の教師となり彼女を導き、ついには夫となる人物でもあり、Sue に想いを寄せる Jude にとっては、この男は恩師であると同時に、Sue を巡る競合相手ともなる人物である。実にこの物語の主人公に深く関わる人物であると言える。Jude は涙ながらの彼との別れを惜しむが、この Phillotson と Jude の間には、実は分ちがたい絆が存在している。この教師の存在は、少年期以来、彼の根本的な人格形成に大きな影響を与えており、その後の女性を巡る彼の感情は、この男の存在が大きく影を落としているのである。

Jude にとって、Phillotson は深淵な知性と教養を持った彼の理想とする憧れの人物として描かれる。Phillotson の抱く思想や感情、その一挙手一投足に彼は着目する。その中で彼の心の琴線に最も強く触れたものが、この教師の Christminster を目指し、大学で高等教育を収めようと言う野望である。こうした野望に彼も惹かれ、後に彼も同じことを志向するようになるのである。彼の真摯に学問を向き合い、上を目指す姿勢に Jude もまた惹かれて行き、Jude は Phillotson の野望を模倣するように同じ志を抱くようになって行く。

ルネ・ジラールは『欲望の現象学』において、小説で描かれる恋愛の三角関係をはじめとする愛憎が錯綜する人物関係の中の人間の情念を考察し、その錯綜する人間関係の渦中で行動し、葛藤、苦悩する人物の欲望は自身による自発的なものではなく、三角関係の中の競合相手や読書などで知った架空の人物や伝説上の存在と言った他者、特に同性の他者の存在を強く意識し、これを模倣したものであると分析する。例として、ジラールはフロベールの小説等を引き合いに出し、「エンマ・ボヴァリーは、彼女の想像力を満たすロマンティックなヒロインたちを通じて欲望する。彼女が少女時代にむさぼり読んだ通俗小説が、彼女の中のすべての自発的感情を破壊してしまったのだ」と述べる。つまり、「ボヴァリー夫人」の主人公は、耽溺する小説のヒロインの欲望、情念を模倣し、それを内面化して行動するのである。ジラールはこれを欲望の媒体と呼んでいるが、こうした事象は Phillotson と Jude にも該当すると考えられる。Jude にとって、Phillotson がまさにこの欲望の媒体とも言うべき存在であり、彼の人格形成において大きな存在感を占める。つまり、この教師の野心や情念を彼は内面化するのである。後に二人の女性と関わり、苦悩する彼の精神や欲望の根源にはこの恩師の存在が多大なものとしてあるのである。

彼は Phillotson を範としてその情念や欲望を模倣し、大学を目指し、読書と勉学に励むようになる。その結果として、Jude は恩師と彼が向かった大学都市の Christminster にも強い憧憬を寄せ、故郷の地から、かの地の方向に目を向け、そこに熱い眼差しを向けるのである。そして、その描写は、非常に特徴的な描写によって表され、読者の目を引くものとなっている。

It was not late when he arrived at the place of outlook, only just after dusk; but a black north-east sky, accompanied by a wind from the same quarter, made the occasion dark enough. He was rewarded; but what he saw was not the lamps in rows, as he had half expected. No individual light was visible, only a halo or glow-fog overarching the place against the black

heavens behind it, making the light and the city distant but a mile or so.²

Jude の視線は Christminster のある方角の地平線の向こうの風景に向けられる。黄昏時の風景の空は“black”，“dark”と語られ、そこには曖昧模糊として僅かな光と霧だけが視界に入って来る。その光景に彼は惹かれていく。それは、彼の恩師であり、理想の男性像である Richard Phillotson が目指した土地であるためであり、彼は、風景の薄闇と光に目を寄せながら、Phillotson の彼の地での所在に想いを馳せるのである。

ここで Jude は Phillotson の野心を内面化し、大学と Christminster の街に強い憧憬を抱いている訳であるが、同時に特徴的な面として、Jude が感知し、内面に抱き籠とする Phillotson は Jude が思い描く独自のイメージによってその実像が歪められ、彼の精神に張り付いてしまっているという面がある。それは上記の場面で語り手によって、示唆されている。その様子は、“He set himself to wonder on the exact point in the glow where the schoolmaster might be — he who never communicated with anybody at Marygreen now; who was as if dead to them here” (21) と語られる。Jude が暮らす Marygreen において、村を離れ、Christminster へと移住していった Phillotson は既に存在しない死者同然であったと表現されている。死者と霊のイメージ、これこそが Jude が範として、内面に取り入れることになる Phillotson の姿となるのである。

この Phillotson の存在を考慮に入れて、前述の大学都市の風景に再び立ち返ってみると、暗い空と仄かな光の風景に含まれる意義が見えてくる。Jude にとって、Phillotson は霊的な存在となっていたことが示唆されていた訳であるが、彼が情熱を持って目指し、旅立った大学都市は、高度な天上のような世界という意味を帯びてくるように思われる。この曖昧模糊とした闇と仄かな光の風景は、彼にとって、Phillotson の存在を啓示する彼岸や天上に近い場所の神秘的な入り口であり、Phillotson はそうした神秘的な土地に住む霊として存在するようになる。実際に、遠くに臨む Christminster の風景は

さらに後に、このように語られる。“By moving to a spot a little way off he uncovered the horizon in a north-easterly direction. There actually rose the faint halo, a small dim nebulousness, hardly recognizable save by the eye of faith.” (86) 即ち、信仰心の目なしには、容易に認知できない薄闇の視覚的に不鮮明な世界と描写されるのである。ここでいう“the eye of the faith”とは Jude の大学都市への憧憬とそこに学問の徒として生きる恩師に対する憧憬の念であるが、こうした信心によって認識する光景はまさに宗教的な天上の世界、死者や霊の住む彼岸のイメージであると言えよう。

このように、彼にとって、Christminster は霊の住む理想の楽園的な土地としての意味合いを持つ。彼は Phillotson が目指したように、Phillotson と同じくその土地を目指そうとするが、先に見たように、彼にとって Phillotson は死者的、霊的な面を持った存在であり、それに憧れの感情を抱く Jude は、この大学都市への情熱を抱くと同時に、それを目指す過程において、自身も霊になろうとする。つまり、彼はその精神的志向として、身体が存在を脱し、肉体を超越した霊となり、そうした存在が住まう彼岸の世界を求めようになる。

それを実証するかのように、彼の意識はこの風景に強く集中し、想像をめぐらせるが、彼はここで自身の身体を一時、棚上げし、幻想に耽溺する。言い換えれば、ここで彼はまた死者、霊を模倣し、彼自身も同じように霊的な存在になろうと志向し始めるのである。その契機となるものが、この神秘的な風景から彼に向って吹いてくる風である。

He had heard that breezes travelled at the rate of ten miles an hour, and the fact now come into his mind. He parted his lips as he faced the north-east, and drew in the wind as if it were a sweet liquor.

‘You,’ he said, addressing the breeze caressingly, ‘were in Christminster city between one and two hours ago, floating along the streets, pulling round the weather-cocks, touching Mr. Phillotson’s face, being breathed by him;

and now you are here, breathed by me—you, the very same.’ (21-22)

Jude はかの地から吹き付けて来る風を通して、街の存在とそこに存在している恩師 Phillotson とのつながりを得ようとする。ここで街から吹いてくる風は、彼にとって風は単なる自然現象ではない。彼にとっては Phillotson と彼を取り巻いているであろう Christminster の街の様子を彼の下へと運んでくる霊的な使者のような存在であり、彼と Phillotson を結びつける霊的な媒体となってくるのである。

彼の呼びかけに応えるように、偶然に街の方から風に合わせて、鐘の音が彼の耳に届く。それによって Jude はより一層、神秘的な存在を強く感じ取ってしまうのである。風と共に聞こえて来る音は、彼の想いに応える声となって Jude の耳に届く。彼は理想の地へと去った恩師とその土地の素晴らしさを伝える霊との交感をしているかのような幻想に駆られるのである。この時の彼の様子は、“He had become entirely lost to his bodily situation” (22) と語られ、この霊と共鳴するかのように彼自身も自分の身体が存在やそれを取り巻く現実の状況を忘却し、霊となって理想の土地へと向かうかのような幻想に耽溺している様子が描かれる。

このように、彼の内面には肉体を超越し、この現世と自分の肉体を踏破して彼岸へと向かう志向、そして霊的な存在との繋がり、交感しようとする志向を内に秘めている。これは換言すれば、同時に身体的生命、その存在の消失である死に対する親和性とも繋がっていると言えるだろう。

こうした彼の精神とその風貌、行動にはさらに独自のイメージ群が現れ、それを表象する。Jude の風貌は、後に成長するとこうした内面を象徴的に反映するようなものとなって出現する。“He was of dark complexion, with dark harmonizing eyes, and he wore a closely trimmed black beard of some more advanced growth than is usual at his age” (89) とその姿は描写され、成人した彼の姿はその風貌に闇や黒色が支配的なものとなっている。このような彼の風貌を支配する暗黒色は上述した遠くの Christminster の暗黒の風景のイ

メージを喚起し、そうした曖昧模糊とした仄かな闇に包まれた土地を志向した彼の魂を象徴的に示すものとなっていると考えられる。即ち、前述した死者、霊の世界を想起するようなイメージを彼の風貌は備えているのである。こうした姿と実際に、Jude が居住し、間近で目に入る Christminster 風景は彼の風貌と良く調和する。この街の闇は黒を含むこうした彼の姿を包み込み、彼の身体が存在を視覚的にも消去し、彼自身にもその存在感を消失させる。Jude の姿は “In the gloom it was as if he ran against them [souls] without feeling their bodily frames” (93) と語られ、“gloom” と描かれる夜の街の闇の空間に共鳴するかのように彼の姿は良く溶け込み、“as if he ran against them without feeling their bodily frames” とあるように、その中で身体を少年期と同様に忘却し、霊 [souls] との交感のような幻想に耽溺するのである。このように、彼の風貌に数多く含まれる闇と暗黒という要素は、こうした闇へと向かい、身体を度外視する彼の志向を強く象徴したものであると言える。

このような肉体に対する度外視の意識はさらに Christminster を目指す為の彼の行動、特に職業の選択とその職業生活の中にも垣間見ることができる。彼は、建築物やその空間に強い関心を持ち収入の為、職業として石工を選択することになる。この石工という職業と死という問題に関して、Majorie Garson は次のように指摘する。

His work chills Jude and make him vulnerable to the lung infection which eventually kills him; the dust marks him and makes him invisible to those who look through his body as through a pane of glass.³

Garson は、石工という社会階級の中では下層に属する職業は、灰や埃の舞い上がる劣悪な労働環境の為に、物語の最後の Jude の死や肉体を蝕む病の一因になっていたことを指摘し、この下層の人間が従事すると社会的に認識される職業が肉体の弱体化と死と密接に繋がっていると述べる。そしてさらに、灰に塗れた彼の姿は視覚的にも、彼を “invisible”, 不可視的なものにし、

その身体の実在感を希薄にさせることも加えて分析し、述べている⁴。こうした彼の石工としての側面は非常に生者というよりも、世界から切り離されて存在する日陰の世界の亡者や霊とアナロジーを成していると考えられる。実際に、Christminster で過ごす彼の姿は、“He was a young workman in a white blouse, and with stone-dust in the creases of his clothes; and in passing him they did not even see him, or hear him, rather saw through him as through a pane of glass at their family beyond” (100) と語られる。そしてまた、街を徘徊する彼の姿もまた “haunt”, “hover” という言葉で示され、彼に付随する死者、霊のイメージを暗示するものとなっている。

しかし、こうした肉体を視界の外に置き、霊を希求する彼の志向は、必然的に人間の身体に存在する本能的な衝動と対立し、衝突することになる。即ち、性的な情念との対立である。霊に憧憬を抱き、身体を度外視し、霊的存在となることを無意識的に志向する Jude であるが、彼は決して死者でも霊でもなく実際に肉体をもった生者である。そうである以上、生物的な本能に根差す、性的な情念というものから逃れることは容易ではない。そうした本能的情念は、女性の存在によって強く喚起されるが、その肉体の存在感を強く呼び起こす人物こそが Arabella である。彼女との出会いにより、Jude は度外視していた肉体とそれに関わる情念を呼び起こされるのである。彼は一時的に情動に溺れ、彼女と関係を結ぶ。その過程で彼は肉体と霊を志向する精神との狭間で強く葛藤を経験し始めることになる。その際に、再び、前述した霊、死者のような Phillotson を想起される描写は登場し、彼の霊と身体との狭間の葛藤は描かれる。

When he got back to the house, his aunt had gone to bed, and a general consciousness of his neglect seemed written on the face of all things confronting him. He went upstairs without light, and the dim interior of his room accosted him with sad inquiry. There lay his book open, just as he left it, and the capital letters on the title-page regarded him with fixed reproach

in the grey starlight, like the unclosed eyes of a dead man. (53)

Arabella との関係に耽溺する中で彼は、勉学の手を中断してしまう。日中は、Arabella との関係に耽溺する Jude であるが、夜になると闇の中で彼に後悔の念が押し寄せる。それを最も象徴的に表象するものが彼の家の薄暗い闇の空間に灰色の星の明かりの下に浮かび上がる聖書の文字である。新約聖書を意味する Η ΚΑΙΝΗ ΔΙΑΘΗΚΗ (53) の文字は闇の中で、まるで死者 “dead man” の目のように出現するのである。またこの書物の表紙は古典ギリシャ語で表記されているが、こうした言語は “dead language”，死語であり、今は現存しない死者の言葉である。こうした点もこの書物の持つ死者的なイメージを強調する。この描写はまさに亡霊が彼の眼前に出現し、彼の肉欲の罪を憤怒や糾弾の念に満ちた視線によって咎めているかのようなのである。この亡霊のような眼のイメージが想起させるのは、勿論、Jude の師である Phillotson である。

Jude にこうした書物を手にさせた教養に対する情熱は Phillotson の影響によるものであり、またそれに加えて、彼は実際にこの教師から餞別の贈り物として、本を受け取っている。そのため、薄闇の中に現れる本のイメージは、Phillotson の存在を色濃く暗示していると言える。故に、この彼を見つめる死者の目の描写からは、Jude が自らの罪を理想とした存在からの無言の糾弾を受け、葛藤を迫られるという精神状態が読み取れるようになっている。

彼は肉欲的な情念に強く引き込まれながらも肉体を超えた霊と死者の世界と依然として強い繋がりを持っているのである。女性に誘惑され、身体的情念に耽溺する中であっても、彼の中で Phillotson は依然として理想の霊的存在として影を落とし続けるのである。ここから、Phillotson は依然として Jude の精神の根源的な存在であり、精神的な支柱となっていると言える。

このように、Jude は Phillotson を模倣し、Christminster を目指し、恩師と同じような教養を得ようとする。Phillotson は Marygreen を立ち去って以

来、住人にとっては、今は亡き者、死者同然に語られる存在であったが、そうした彼に対するイメージは Jude にこの男が霊的な存在になったかのように感知させることを促し、彼は Christminster の存在する神聖な霊のような存在として恩師を求め、模倣するようになる。その影響の下で、Jude は肉体を持たない死者と彼岸の世界（死者の世界）に親しみ、時折、自身の身体存在を忘却し、自らも霊になることを志向するようになってしまうのである。そして、それは、Arabella の誘惑の下にあっても、彼の精神を惹き付け、絡めとり、葛藤させる強固な精神的支柱であったのである。

このような精神的志向を持つ Jude であるが、身体に潜む性的情念に完全に抗い、逃れることはできない。Arabella の誘惑の前に屈し、性関係に耽溺した結果、不幸な結婚関係を持つてしまうのである。しかし、ほどなくこの関係は二人の性格の不一致から破綻し、彼は自分の中にある Phillotson から得た精神性を捨てきれず、再度、Christminster を目指すこととなる。これ以後、彼は性と自分の精神の狭間で苦悩しながら生きていくことになっていく。その後、移住した Christminster で彼は、Sue Bridehead と出会うこととなるのであるが、彼女の登場によって、彼と Phillotson, Christminster を巡る関係は激しく動揺し、複雑化する。そして、この霊的なものを求める志向と身体存在との葛藤も本格的に顕在化するのである。

2. Jude, Phillotson, Sue の関係性

成人した Jude は、念願の Christminster に移住し、生活することになる。しかし、そこで彼が体験し、直面することになったものはそれまで繰り返し夢想してきた理想の人の姿でも街の姿でもなかった。少年期以来の幻想を引き摺って、しばしば夜の街の中で街の霊とも言うべき偉人、知識人の霊を幻視し、交感することこそあるが、それも一時の幻想に過ぎず、昼になれば、“What at night had been perfect and ideal was by day the more or less defective real” (97) と語られるように霧散してしまう。彼に当初、理想的な霊的世界を幻視させた大学街の姿は、陽光の下では年月と風雨に曝され続けて、醜い

様相を示すのみであり、彼を大きく幻滅させる。

彼の幻滅は Christminster の街のみならず、そこに移り住み学究生活を送っていたと思われていた恩師 Phillotson の姿にも及ぶ。Phillotson は学位を取らずに、ひっそりとかつて目指した道を諦めて暮らす姿を Jude は目撃してしまい、幻滅を経験することとなる。その上に、Phillotson は彼のことを全く覚えておらず、一目ただけでかつての生徒であったことを思い出しはもらえない。この無慈悲な現状は彼の幻滅を一層に強化する。ここで、彼が抱いてきた恩師に対する想いが彼一人の幻想であったことが露呈してしまう。彼の中で Phillotson は崇高な霊ではなく、ただの男になってしまうのである。

この喪失を埋めるかのように、彼の中で存在感を増す人物が彼の従妹であり、Christminster で暮らす Sue Bridehead である。Jude は彼女のことを叔母から、聞き、写真でその姿を目にして以来、密やかに興味を抱き、惹かれていく。

上述したように Phillotson の虚像は崩壊していくのであるが、ここで新たに登場するこの Sue により、Jude と Phillotson の関係性は今までとは異なったものとなってくる。彼は、ある時、彼女が滞在先の下宿で家主の夫人と思想的な対立を起し、街から移住を余儀なくされることとなるという旨の知らせを彼女自身から受け取る。これがきっかけとなって、彼と Phillotson の関係の間にこの Sue が入り込んでくることとなる。

彼女を街に引き止める為に Jude は Phillotson を探し、彼女を紹介し、恩師の補佐の教員として推薦する。こうして Sue は Jude の師である Phillotson とも知り合い、彼の指導を受けながら、教員となっていく。言わば、彼女は彼の子弟となる訳である。知的な指導者とその指導を受ける子弟、そして二人の間に成立する知的な精神の交流、このような関係は少年期の Jude と Phillotson の教師と教え子という関係と近似し、想起させるものである。Sue は Jude の手によって過去の彼の姿とこの男との関係性を再現したような立場に置かれるのである。Jude は Sue を Phillotson の指導下に置くことを介して、かつて理想として渴望した彼と Jude の友情や絆を再構築しよう

としているかのように、ここでの彼と彼女の関係性は描かれるのである。つまり、Sue は Jude を代替する人物として機能するのである。

Jude は Sue を自身と非常に類似した存在であり、自分の延長線上の存在として無意識的に認識している。彼は、初めて彼女を Christminster で見た際に、彼女の話し方、声の中に自分と同じものを認識する。“he recognized in the accents certain qualities of his own voice; softened and sweetened, but his own” (103) とそれは描かれ、彼は彼女の中に自分と同質のものがまるで鏡像のように宿っている様子を感じ取る。こうした点から、彼が彼女を自分と近似し、また自分の影のような存在として、捉えていることが判る。そうした存在である Sue を Jude は自分の代理的存在として Phillotson の傍に置くことによって、失われかけた Phillotson との絆を回復させようとするのである。彼は Phillotson を完全には捨て切れないのである。このようにして、彼は Sue の存在によって、かつての理想的人物との関係を維持しようとする。換言すれば、無意識的にはあるが、Jude は Phillotson の喪失を埋める為に Sue を巧みに利用するのである。

しかし、このような試みは結果として失敗に終わり、彼らの関係に激しい動揺をもたらすことになる。Sue と Phillotson の関係は Jude とのそれのようには、上手く機能しない。ここで問題となってくるものが、かつて Jude の下にも降りかかった性と身体的情動という問題である。男性と女性という2人の性差ゆえに破綻することになってしまうのである。男性教師と女性の教え子という関係は社会的にも強く制限と抑圧を受ける。語り手は、彼と彼女の師弟関係の中に浮上してくる社会的な抑圧の例として、“some article in the Code made it necessary that respectable, elderly woman should be present at these lessons” (124) と語り、男性と女性の師弟関係には、第三者的な既婚の夫人の監視の目が必要であり、この2人の師弟関係においては常に監視の目が光っていたという事例を挙げる。こうした数々の社会的な抑圧は、Sue には強い圧迫感をもたらし、彼女を苦しめることになるのである。

こうした性差の規範やそれに基づく男女の関係性というものに対して、彼

女は既存の女性のように唯々諾々と受け入れることができない。彼女は強くそれに反発を感じ、そこからの自由を常に求める。Sue は飽くまでも男性と対等な力と対等な関係性を求め、性差による抑圧に彼女は過敏に反応し、反発する。それが最も端的に現れる場面が、彼女が Phillotson の助手の教師となるために入学することになる師範学校での彼女の夜間の学寮の窓からの投身行為である。

Presently, towards dusk, the pupils, as they sat, heard exclamations from the first-year's girls in an adjoining class-room, and one rushed in to say that Sue Bridehead had got out of the back window of the room in which she had been confined, escaped in the dark across the lawn, and disappeared. (170)

彼女は Phillotson の助手として過ごす一方で Jude との友情と交流も希求し、学寮を一時的に抜け出して、彼と行動を共にする。しかし、寮の門限を破り、男性である Jude との関係が知れてしまった為に、懲罰として彼女は学寮の部屋に監禁されてしまう。彼女はここでも性別による社会規範によって自由を奪われてしまうのである。それに対する反発と言えるものが、この彼女の行動である。彼女は衝動的にこの抑圧から逃れる為に窓からその身を投げて脱出してしてしまうのである。

この行動は非常に彼女の特異な内面を示唆するものである。ここで彼女は自身の肉体が投身によって負傷してしまうという危険性すら考慮せず、この自殺的とも言える行動に出ているが、こうした肉体の軽視は、彼女の内に眠る女性としての身体の実在の破壊や超越の志向を暗示していると考えられる。

彼女をこうした行動を起こさせる動因というべきものはその精神であり、先に述べたように、彼女は性というものに関して、特異な志向を持っている。彼女は女性という性の枠を超え、男性的ないし中性的な存在となろうと志向が存在する。それは彼女の周辺や彼女自身の口から語られる。例えば、Jude の叔母の Drusilla は幼年時代の彼女を知る人物であるが、彼女は Jude に対

して、Sue について、“She was not exactly tomboy, you know; but she could do things that only boys do” (132) と語る。彼女には少女らしからぬ側面があり、時に少年のような面を垣間見せていたことがここから分かる。そして彼女自身の口からも既存の女性とは異なり、性差という区分を超越しようとする側面があったことが語られる。それが、最も顕著に表されるのが、彼女が Jude に語る過去の男子学生との交際関係である。

‘Yes. We used to go about together—on walking tours, reading tours, and things of that sort—like two men almost. He asked me to live with him, and I agreed to by letter. But when I joined him in London I found he meant a different thing from what I meant. He wanted me to be his mistress, in fact, but I wasn’t in love with him—and on my saying I should go away if he didn’t agree to *my* plan, he did so. We shared a sitting-room for fifteen months; [...]’. (177)

Sue はこの男性と良き盟友として共感し、共に旅行や読書などを楽しんだ。しかし、Sue はこの男性と性関係を持ち、恋人となることは拒絶し、“like two men almost” と語られるように、男性同士の知的な交流のような関係に留まったのである。こうしたところからもやはり、彼女はその精神的な志向として女性という性的な枠組みに収まることを拒絶し、そこから常に逃れようとする性格を帯びていることがわかる。

前述した学寮の窓からの大胆な投身は、こうした精神が反映した行為である。彼女が懲罰を受けた訳は、彼女が女性であり、成した行為は当時の女性としての規範、社会的な役割から考えて、不適切と周囲から認識されたがゆえである。その為、彼女はこうした社会規範の源泉ともなっている自身の女性としての身体をあえて度外視し、それを破壊するかのような行動に及んでいるのである。加えて、彼女の身体は宵闇の空間の中へと投げ出され、消えてしまうのだが、こうした視覚的に彼女の身体が隠されるという描写は彼女

の自身の女性という肉体、性に対する反発の意思を象徴的に示しているといえる。

この師範学校での事件を機に、Phillotson と彼女は結婚し、この醜聞を丸く収めようとするが、こうした Sue の性に対する拒絶と反発の精神のために Phillotson との結婚も容易に破綻してしまう。この2人の関係の破綻を決定的に示す事件もまた上述の投身を再現したかのような二度目の投身である。

彼女は Phillotson と肉体関係を拒絶し、彼が自分の部屋へ入ってくることを禁止し、別居同然の状態に陥る。偶然 Phillotson は誤って彼女の部屋へ侵入してしまう。その際の彼女は、“she mounted upon the sill and leapt out. She disappeared in the darkness, and he heard her fall below” (272) と描写され、Sue はまたしても衝動的にその身を窓から投げ出してしまうのである。注目すべきことに、この投身行為もやはり前回のものと同様に彼女は身体を度外視し、やはりその身を闇の中に消し去っている。反復される暗黒への身体の投棄は彼女に押し付けられる性規範と身体に投げ掛けられるセクシュアリティに対する強烈な拒絶の意思を示しているのである。こうして、彼女の Phillotson の関係は破綻に至り、彼女にとって Phillotson は性的な抑圧を強く喚起し、自覚させる存在となってしまうのである。

既に見たように、Jude は Sue を介することで恩師との友情を維持しようとしたのであるが、この男が Sue と男女の仲と思われる関係となった時、Jude にも以前とは大きく変わった意義を持つ存在として浮上してくる。

He looked over the town into the country beyond, to the trees which screened her whose presence had at first been the support of his heart, and whose loss was now a maddening torture. But for this blow he might have borne with his fate. With Sue as companion he could have renounced his ambitions with a smile. Without her it was inevitable that the reaction from the long strain to which he had subjected himself should affect him disastrously. Phillotson had no doubt passed through a similar intellectual

disappointment to that which now enveloped him. But the schoolmaster had been since blest with the consolation of sweet Sue, while for him there was no consoler. (137-138)

Jude は Christminster に暮らす中、経済的な問題など大学へ至るために彼にとって壁となる様々な困難と直面せざるを得なくなる。そして、絶対的にそれが不可能に近いことが明白となり、彼は絶望感に苛まれる。そうした渦中で Jude は Phillotson と Sue の関係を知ることになるのである。彼は自分と同じように大学を諦めた Phillotson へ目を向ける。彼は目標を諦めても Sue という存在があり、それによって彼の失望の精神的傷は癒される。だが、一方で自分にはそれがない。同じような状況にありながらも大きく異なる 2 人の対照的な様子が彼の目前に浮上し、彼は絶望するのである。

ここから示されるものは、Jude の男性としての Phillotson に対する嫉妬の感情である。ここで彼が男性として女性である Sue に想いを寄せ、求めているということ、その感情がこうした恩師に対する複雑な感情を喚起させているということが露呈するのである。Jude にとってもはや Phillotson は Sue を巡り対立する只の肉体を持った男性であり、もはや霊的な存在ではない。この教師の存在によって彼の男性としての情念が喚起されているのである。言わば、彼は Phillotson と Sue の関係性を通して、自身の男性としての性的な欲望を Arabella との関係以来、再び発見してしまう。そして、Jude と Phillotson の関係もここで崩壊してしまうのである。

Jude はこのように、男性としての情念を、Phillotson に刺激されるが、それでも尚、彼は依然として肉体的な情念以上に、Phillotson の代理となる新たに崇拜する霊的な存在を求め続けようとする。それこそが Sue である。

Jude の知覚には、彼女は霊的な存在として浮かび上がってくる。それを示すように、師範学校から投身を経て、脱走し、彼の下を訪れた彼女の姿は“marine deity” (172) と語られ、また Jude の大学入学への希望が絶たれ、絶望に打ちひしがれる時には、“The spirit of Sue seemed to hover round him

and prevent his flirting and drinking with the frolicsome who made advances—wistful to gain a little joy” (140) とその様子が語られる。絶望のあまり自暴自棄になりそうになる彼を思いとどませるのは Sue の存在であり、まるで Sue という霊が彼の守護霊のようにその精神を守るかのように描かれるのである。

またさらに、Phillotson と彼女の結婚が決定した時にもさらに彼女の霊的イメージは継続して現れる。Phillotson に対する嫉妬と絶望感が増す中で彼は、彼女を思い返しながらかつて働いていた場所であり、初めて彼女と出合った場所へと赴くが、その際の様子はやはり霊的存在が彼を取り巻いているかのように描かれる。彼女が不在となったその場所は、“It was as if she were dead, and nobody had been found capable of succeeding her in that artistic pursuit. Hers was now the City phantom” (213) と語られる。彼は彼女の姿を想起するが、彼にとって彼女は死者の霊のような存在となっていたことがここで語られるのである。加えて、ここでは彼女の知性や洗練された姿は同時に、比類ない高度な霊のようなイメージ、彼の愛する Christminster を体現した霊 “the City phantom” ともなっていたことがここで示唆されるのである。

このように Jude にとって彼女はかつての Phillotson を代替する役目をもった霊となるのである。Phillotson と Sue の関係に直面し、彼女に対する性的情動を感知した Jude はこの Sue を霊的な存在としての価値を見出し、そうした認識によって、自身の性的情念を振り切ろうとするのである。言い換えれば、Jude は彼女を性的情念の対象としての存在として感知する一方で、霊的な存在としても認識しており、そして、その双方の Sue に対する感情の根源には Phillotson の存在があると言えるのである。また、Sue にとっても先に見たように、Phillotson は性に関する抑圧をもたらず人物であり、Jude と Sue 双方にとって、彼は性に関わる葛藤を呼び起こす存在として機能するのである。

こうした関係の中で Sue もまた、この霊を追求する Jude と互いに惹かれ

合っていく。彼が肉体を度外視し、彼女を霊的存在として捉え、交遊するように、Sue は自身の身体と性というものを拒絶し、そこから逃れようとする志向を持つ。そんな彼女にとって Jude は渴望する知的交遊を得られる相応しい相手であった。二人は共通して身体とその内にある性的情念や、そして性に関わる観念と対立する感情を持っており、共通の地盤とも言うべきものが存在するのである。故に2人は互いに惹かれ合って行き、肉体関係を度外視し、通常の異性間の関係とは異なった特異な友人関係を構築しようとする。それは、当時の社会やその内にある規範と激しく対立することになる。

3. Jude と Sue の関係と社会との対立

Jude と Sue は、互いに惹かれ合い、ついに生活を共にするようになる。その中で、Sue は性関係と法的な結婚関係を持つことも頑なに拒否する。Jude も彼女に同調し、そうした関係にその身を置く。しかし、これは社会にとって特異なものであり、慣例的な性や結婚の規範と対立するものである。そして、この対立は社会の本質というものを暴露する。

Sue は、自分を取り巻き、拘束する社会と文化に対し、強く否定的見解を持つ。Sue は Jude に対して、“Their view of the relations of man and woman are limited, as is proved by their expelling me from the school. Their philosophy only recognizes relations based on animal desire” (201) と語る。社会の男女観というものは婚姻関係、そしてそれに必然的に伴う男女の肉体関係を前提としたものであり、それ以外の友情関係などを容認しない極めて限定されたものであるということに対して、Sue は強く抵抗し、不満を持つ。Jude にとっても、彼女の言葉は強烈な説得力を持つ。実際に Jude もまた過去に Arabella と肉体関係を持ったために、結婚を強いられており、社会は性関係を持った2人を結婚という制度に取り込まずにはいられなかったのである。

近代の男女の関係やそこから派生する肉体的関係、性的関係は当時の社会において重要な存在であった。そして当時、性に関する事象は、精密な注意を以って、運用されるものであったのである。即ち、性に関する事柄、言説

は夫婦と家庭という私的空間の中に収められるものであり、その中でのみ語られるものであったのである。言い換えれば、男女の性関係、それに関わる事柄は全て、婚姻関係と夫婦という関係の中でのみ管理され、保持されなければならなかったのである。

元来、男女が結びつき、成立する家庭と家族という存在は、社会にとって将来有益となる人的な資源の再生産の場でもあった。それは男女の肉体的関係性を大前提とし、生殖を目的の一つとする場であったのである。この為に、それは適切な性の規範、言説によって嚴重に管理され、稼働する装置でなければならなかった。このような点を Michel Foucault は *The History of Sexuality* において、次のように分析している。

canonical law, the Christian pastoral, and civil law. They determined, each its own way, the division between licit and illicit. They were all centered on matrimonial relations: the marital obligation, the ability to fulfill it, the manner in which one complied with it, the requirements and violences that accompanied it, the useless or unwarranted caress for which it was a pretext, its fecundity or the way one went about making it sterile, the moment when one demanded it [...], its frequency and infrequency, and so on. It was this domain that was especially saturated with prescriptions. The sex of husband and wife was beset by rules and recommendations. The marriage relation was the most intense focus of constraints; it was spoken of more than anything else; more than any other relation, it was required to give a detailed accounting itself. It was under constant surveillance:⁵

家庭における夫婦の性は適切な規定とその実践によって管理されなくてはならなかった。性関係は、家庭という空間に押し込められ、性は家庭においてかくあるべしという言説が社会に流布し、それを実際に人びとは内面化し、相互に監視の目を意識しながら家庭の中で性が管理、運営されていたのであ

る。そしてこれは、逆に言えば、こうした規範の逸脱者や婚外の関係性において性関係を持った者などは、告発され、排除される対象となったのである。

これを踏まえて Jude と Arabella, そして Sue と Phillotson の婚姻関係の問題を再び振り返ってみると、彼らもこのシステムによって翻弄されていたことがわかる。性関係を持った Jude と Arabella は、結婚という制度の枠に収まり、適切な規律の下に置かれなければ、社会的にも排除されることは免れ得ないであろうし、また同様に淑女としての性規範を逸脱した Sue が社会的に放逐されないためには、適切な性関係によって支配される場である結婚と家庭という空間に収まることが重要であったと言える。まさに Sue が指摘し、発言したように社会における男女のあり方、関係は彼女の言う“animal desire”, 性的情動と肉体関係をその根底に抱えたものであったのである。

Sue はこうした制度と思想、言説の罫を察知し、糾弾する。Jude もこうした彼女に惹かれ、2人は男女の性的な繋がりを超越した同志としての関係を構築するのである。しかし、彼らの周囲の社会やその下に生きる人間達は彼らを性という枠組みの外に放置することを決して容認しない。彼らは周囲の人間関係を通して、自身の性というものをさらに強く自覚することを強いられるのである。その契機の一つと言えるものが、Arabella と 2 人の出会いである。

Arabella は Jude にかつての性関係の結果として生まれた、2人の子供の存在を知らせ、その子供、Little Father Time の認知と保護を求めて Jude の下を訪れる。彼女の存在は Jude と Sue それぞれに自身の身体に眠る性的情念の存在を否応なく喚起させ、彼らの関係性に強い影響をもたらす。特に、性を拒絶し、Jude と独自の同志としての関係性を育てていた Sue に対しては大きな変化をもたらす存在として現れてくるのである。

Jude は Arabella と再会することによって、再び彼女と肉体関係をもったという事実を彼女の扇情的な肉体を持つ存在と性関係の結果生まれた子供である Little Father Time の存在によって強く喚起させられてしまう。また、

この母子の存在は、性関係を持ちながら、収まるべき結婚という枠組みに収まらず、彼らを放置し続けたという Jude の社会的な異質性を自覚させ、彼にその背徳感と悔恨の念を強く想起させるものである。結果として、Jude は動揺を余儀なくされ、彼女に意識を向けざるを得なくなるのである。

その一方で彼の傍にいる Sue には、性的な情念や欲望をこの女性は喚起させ、牽引するのである。Arabella は Jude に自分の下を訪ねることを要請する。Jude はそれに応じる形で彼女について行こうとするが、Sue はそれを拒絶し、彼を止めようとする。Sue は思わず衝動的に、彼に腕を絡め、自分の女性としての身体の性的な魅力を全面に出して Jude に迫る。そして “I am not a cold-natured, sexless creature” (321) と発言する。この発言は、“animal desire” を基礎とする、即ち、身体的な性関係を前提とする男女の観念とそれが支配する社会制度と慣習に反発してきた彼女のこれまでの行動や思考と大きく矛盾するものである。Sue は Jude に想いを寄せる女性として、同じ女性であり、Jude と肉体関係を持った存在である Arabella に対して嫉妬の感情を抱いているのである。Arabella との接触によって、そのような感情が発露するのである。(実際、彼女はその後、彼と性的関係を持つ。) 上述の彼女の発言と行動からはこうした内面を窺い知ることができる。

しかし、こうした矛盾を経験しながらも彼女は Jude と正式に結婚という枠に収まろうとせず、彼女と Jude は身体的な関係性を可能な限り度外視した関係を構築することをやめず、これを継続しようと試みる。それは、Jude と Sue が Little Father Time を子供として引き取り育てようとした時の言葉に現れる。‘I must say that, if I were better off, I should not stop for a moment to think whose he might be. [...] All the little ones of our time are collectively the children of us adults of the time, and entitled to our general care.’ (330) と彼は発言する。Little Father Time を引き取り、子供として養育するに際して、Jude は血縁こそ完全には繋がらないものの、血縁という肉体関係を前提とした関係性を超える、博愛的な精神によって結びつこうとするのである。この点を William Greenslade は既存の家族という概念に挑戦するもので

あり、それを解体するものであることを “Jude and Sue’s utopian logic has in its sights the destruction of the family system. They pinpoint that ideology which elevates parent-child relations and which insists, in this society, that biological and familial functions are locked together”⁶ と述べ、分析し、指摘する。彼によると、こうした彼らの思考する理想的な新たな家族に対する信念が、既存の家族というものが如何に生物学的（肉体的）な関係性の中に主に構築されていたかということが露呈させていると言う。実際に彼らはそうした生物学的な関係性を踏破しようとするのである。

Jude の言葉に対して Sue は、これに共感して同意し、さらに次のように発言する。‘Yes—so it is, dearest! And we’ll have him here! And if he isn’t yours it makes it all better. I do hope he isn’t—though perhaps I ought not to feel quite that! If he isn’t, I should like so much for us to have him as an adopted child!’ (330) 彼女は、さらに血縁に関して、Little Father Time が Jude とすら血が繋がってない子供であればそれに良かったという発言する。Greenslade はやはりこれが決定的に既存の家族の概念を否定、解体するものであると、“she enthusiastically greets the possibility that the child might not Jude’s: [...] To perceive the child as an aestheticised image of pleasure is to have it immunised from the ideology of family membership”⁷ と分析している。このように Sue と Jude は血縁という絆を超える博愛を用いて新たな家族関係を構築しようとする。

これはまさにその身に矛盾を抱えながら、尚も肉体関係を踏破し、精神性を重視した関係性を求めようとする彼らの最後の抵抗である。既に見たように、家庭、家族というものは性に関する言説が押し込められ、管理される場であり、男女の肉体関係を前提とする場である。それを彼らの関係性は露呈させ、このように踏破しようとするのである。

しかし、そうした抵抗も虚しく、2人の試みは Little Father Time による陰惨な事件によって、完全に打ち碎かれる。彼は Sue と Jude の子供の命を絶ち、自殺するが、この子供をこうした行動へと駆り立てたものは、上述し

たように彼の両親となった Jude と Sue の矛盾した行動である。2人は血縁を踏破した情愛による関係を目指しながらも、その間に性関係を持ち、子供を持つ。彼らは抵抗を試みながらも、結局、性衝動というものに絡め取られてしまっているのである。それでも尚、結婚に及ばない彼らの関係は、社会に受容されるものではなく、拒絶され、住む家すら見つけることも難しくなり、極貧と苦痛の生活を送ることを余儀なくされる。その時に、Little Father Time は Sue との会話の中で最悪の状況に置かれた原因の一つが、子供を持ったことや性に原因があることを耳にしてしまう。彼は Sue、に対して、“Tis because of us children, too, isn't it, that you can't get a good lodging?” (402) と発言し、婚外の関係でしかも多く子供がいるという社会規範を逸脱する関係が今の状況の原因ではないか、そして、“Then if children make so much trouble, why do people have 'em?” (402) と子供をつくり、育てることがもたらす重圧と苦悩を Sue に問うのである。彼女はこれに対して、只、“a law of nature” (402) によって人は子供を持ってしまふのだとこの子供に伝えてしまうのである。この“a law of nature”という言葉は、勿論身体の自然的衝動であり、身体の性的な情念や欲望を指していると思われる。この言葉から、彼女が自身や Jude に潜むこうした衝動の抗い難さとそれに関する諦念を感じていたことが読み取れる。Little Father Time は人間に内在し、子供を生み出すことになるこうした自然の法、即ち、情動の不条理さに衝撃を受ける。これを原因として、生を悲観し、彼は凶行に及んでしまうのである。

しかし、彼のこうした行為は、実は養子として受け入れてくれた Jude と Sue に対する愛情によって行なわれたものであると考えることができる。Sally Shuttleworth はこの行為の動因を、“One of the most disturbing things about Father Time's action in *Jude the Obscure* is that he was trying to be helpful: if the children were removed Sue and Jude could once more lodge together”⁸ と述べ、彼は Sue と Jude が自分と子供達がいなくなれば、この二人が再び一緒に住み、以前の関係を享受できるという考えから、殺人と自殺によって、彼らを助けようという彼の愛情があったことを指摘している。確かに、その

ように解釈することが可能であると言える。彼にとって、自然の法によって、生まれた自分と義兄弟の存在は、彼女の母の悔恨と悲劇的状况の原因であり、両親の平穩を脅かす災禍の存在として映り、それを排除し、彼は両親に安樂を与えようとしているのである。言わば、彼の凶行は彼と両親の間に存在する血縁の枠を超えた純粹な愛情へと還元することができるのであり、それゆえに Little Father Time と Jude と Sue の間には、血縁という身体關係を超越した愛情や絆が確かに存在していると言える。

この彼の両親への愛情から出た行動は、彼らの追及した關係性の負の側面を露呈させる。彼らは“animal desire”，性衝動、それに基づく關係を拒絶してきたが、それは生物としての人間の必然的な営為であり、必要不可欠なものである。これを拒絶し、過剰に観念的な愛情や博愛的思想を追及するということは、生命そのものを軽視あるいは拒絶することに繋がるのである。Little Father Time は、この愛を極端な形で実践し、愛の為に自然の法を敵とみなし、その申し子たる自身と兄弟の生命を絶ってしまうのである。

この事件によって、Sue は自分が追及していた信念が過ちであったのではないかと思返すこととなり、彼らの關係には終止符が打たれることになる。2人はそれぞれ Phillotson と Arabella の下に戻ることを余儀なくされる。彼らは最終的に性という存在を完全に拒絶し、抵抗することが出来ず、悲劇的な最後を迎えることになってしまうのである。

ここで彼らの周辺に表れていた靈的なイメージ群と死を想起させるような行動を再び振り返ってみるとその隠された意義が浮上してくる。彼らの求めた肉体性を度外視し、精神的な博愛や絆を重視するような特異な關係性は、生命を否定、軽視する負の側面を持っていた訳であるが、そうした精神を求める過程で、彼らの周辺に継続して表れていた“dead man”や“phantom”といったイメージ群、そして死と關係付けられ、それを想起するような彼らの行動は、こうした彼らの追い求めた理念の隠された負の側面を暗示していたのである。即ち、彼らの身体を否定するような思想は極端に突き詰めれば、生命の存在そのものを否定する可能性を潜在的に持つということである。

結 論

このように彼らの関係は、社会と対立し、その苦悩の中で彼らの思想に内在する負の側面を露呈させてしまい、結局彼らは、既存の制度や慣習の前に敗北してしまう訳であるが、彼らの求めた関係性の試みとその人生は全く意義のないものであったというわけではない。この彼らの物語は、当時の社会に流布し、人々が受容していた男女の関係性やそれが前提とする家庭、家族のあり方を社会に問うという意義を持っていたのではないだろうか。当時の社会が抱えていた男女の関係性、それは身体が存在と性的情念を前提としたものであった。異性間の性関係とそれによる家庭と家族の構築が社会の男女観の前提であり、目的であったのである。その規範や観念の偏狭さと恣意性を彼らの身体とそれを巡る関係性に関する苦心は暴きだしていたのであり、彼らの敗北と失敗はそれを改めて人々に問うものではないかと考えられる。そして、彼らの周辺にあった目を引く霊的なイメージ、投身行為などの死を想起させる描写等は、一方で、彼らの推し進めた思想や信念の中にある生命の軽視の可能性という負の側面を露呈させながらも、当時の支配的な男女の性観念や規範の前に敗れる彼らの悲哀を印象的に強く読者に訴えるのもであったのではないだろうか。また、主人公たちの抱いた革新的な男女の在り方の負の側面を見せつつも、同時に当時の社会の偏狭な面も露呈させるというこの *Jude the Obscure* という作品は、双方の思想や見識のあらゆる面を見せることで、読者に現状とこれからの人間社会のあり方を強く訴えかけるものであったのではないかと考えられる。

注

1. ルネ・ジラルール 吉田幸男訳『欲望の現象学：ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』（東京：法政大学出版局，1971），p. 4.
2. Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (New York: AMS Press, 1895, 1984), p. 21. 本稿での本作からの引用は全てこの版によるものである。
3. Majorie Garson, *Hardy's Fables of Integrity: Woman, Body, Text.* (Oxford: Clarendon

Press, 1991), p. 157.

4. Marjorie Garson はまた “The facts that he, [...] is a stone-mason and that his dusty working clothes make him invisible to the upper-class under graduate who pass him on the street suggest that it is his class position” (Ibid., p. 157.) とも述べ、彼の職業とそこでの姿の不可視性は、彼の死への親近性に加えて、彼と学生達との階級の差もまた露呈させているということを指摘している。
5. Michel Foucault, *The History of Sexuality: Volume I: An Introduction* Trans. Robert Hurley (New York: Pabtheon Books 1978,) , p. 37.
6. William Greenslade, *Degeneration, Culture and The Novel 1880-1940*. (Cambridge: Cambridge UP, 1994,) , p. 179.
7. Ibid., p.179.
8. Sally Shuttleworth, “‘Done because we are too menny’: Little Father Time and Child Suicide in Lare-Victorian Culture,” in *Thomas Hardy: Text and Contexts*, ed. Philip Mallett (London: Macmillan, 2002), p. 133.

参 考 文 献

- Deresiewicz, William. “Thomas Hardy and the History of Friendship Between the Sexes” *The Wordsworth Circle*, Winter 38 (2007): 56-63.
- Foucault, Michel. *The History of Sexuality: Volume I: An Introduction*. Trans. Robert Hurley New York: Pabtheon Books, 1978.
- Garson, Majorie. *Hardy's Fables of Integrity: Woman, Body, Text*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Girodano, Frank R, Jr. “*T'd Have My Life Unbe*”: *Thomas Hardy's Self-Destructive Characters*, Alabama: U of Alabama P, 1984.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and The Novel 1880-1940*, Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*, London: Macmillan, 1984.
- . *Jude the Obscure*, New York: AMS Press, 1984.
- Houghton, Walter. E. *Victorian Frame of Mind 1830-1870*, New Haven: Yale UP, 1985.
- Mallett, Philip, ed. *Thomas Hardy: Text and Contexts*. London: Macmillan, 2002.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, NewYork: Columbia UP, 1985.
- Shuttleworth, Sally. “‘Done because we are too menny’: Little Father Time and Child

Suicide in Late-Victorian Culture,” in *Thomas Hardy : Text and Contexts*, ed. Philip Mallett London: Macmillan, 2002. p.133-155.

Thomas, Jane. *Thomas Hardy, Jude the Obscure and 'Comradely Love'* Literature and History, Third series 16: 2 (2007) 1-15.

ルネ・ジラルル 吉田幸男訳『欲望の現象学：ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』東京：法政大学出版局，1971.

Ghostly Images and Death Images in *Jude the Obscure*: A Struggle between Mind and Body

TANIYAMA, Tomohiko

Jude the Obscure is Thomas Hardy's last novel. It is about the tragedy of the failure of marriage and sexual relationships. Jude Fawley and Sue Bridehead, the protagonists of the story, both wreck of their way of life and marriage through sexual emotion and cultural repression regarding sex. For them, therefore, sex and gender are always problematized. Their bodies, especially, become a fatal problem, because the presence of the body is the cause of impulsive sexual emotion and the gender code which binds them. Jude and Sue have negative emotions towards the presence of body and try to achieve an ideal comradeship without bodily sexual emotion or a sexual relationship. To have such a relationship, they are in conflict with instinctive impulses within their bodies and the gender code within their culture. Whenever they suffer and think about their ambition, particular images repetitiously appear around them. These are images of ghosts, specters, and deities, which have no physical body, and images of death. This, no doubt, is symbolical expression. And it indicates not only their hidden emotion of body and sex, when they are in conflict and suffering, but also suggests the hidden meaning of their ideal comradeship.

This negative emotions about the body and their ideal thought seem to be generated from the relationship between the characters: it comes from the relationship between Jude and Phillotson, or the triangular relationship between Jude, Phillotson and Sue. Here, focusing on symbolical images, which imply the internal movement of characters, and the relationships between the characters which generate their sexual emotions or ambitions, I would like to consider the meaning of their experimental action to achieve an ideal comradeship in conflict with culture and society.

In the web of relationships which generate sexual emotion and negative feelings about the body, Richard Phillotson, Jude's teacher, has an important position. He is a stimulus, not only to Jude's internal emotion but also to Sue's. He brings to Jude's mind an obsession about admission to university, a longing for higher education and sexual emotion. Jude admires of him as an ideal model for his life. For Jude, he is recognized as a holy intellectual spirit that should be his ideal model. Phillotson as an ideal being, therefore, is represented with the images of a spirit or deadman. Jude imitates Phillotson's desire to be admitted to university. At the same time, he attempts to be an equivalent being to him. For being so, he desires to be a spiritual being. He, therefore, often forgets his bodily presence, and indulges himself in fancy as if he has become a spiritual being without a body. Therefore, it could be said that Phillotson is the cause of Jude's ambition and fanciful personality. However, when the schoolmaster marries Sue, the marriage causes him to be envious of Phillotson. This is an emotion derived from his masculine desire to have Sue. He has also function to stimulate his sexual emotion. As a consequence, he has experiences conflict between his ideal vision and sexual emotion.

Meanwhile his presence makes Sue aware of the sexual repression which assaults her. He demands that she be a proper lady or have a sexual relationship with him. As a result, she inevitably feels gender restriction and has a negative emotion for the brutal sexual emotion directed toward her. As a reaction to such restrictions, she takes characteristic action. To escape from it, she throws herself from a window. This suicidal action is a symbolical action. Throwing herself from window implies her subconscious will to negate her own body. As the body is an object of sexual desire and gender restriction, she attempts to erase it to gain her freedom. This curious action which evokes suicide and death, indicates such will. Phillotson, thus, is the cause of her rebellious action and negative thoughts about sex.

In the same way, Phillotson is the stimulus for their ideal ambition and suffering of sexual emotion. Due to his presence they have known conflict and suffering regarding sex and gender. As well as this, a negative emotion for the body and ideals transcending the body are generated from him. And their desire to negate their bodies is represented with ghostly images and deathlike images.

The ghostly images and images of death represent their negative emotion.

But this has another meaning, which is discovered by the relationship between Jude, Sue and Little Father Time, their stepchild. Jude and Sue feel sympathy for each other. They attempt to live together without being married legally and without a sexual relationship. This, however, is hard to achieve. Finally, they can't resist such an instinctive desire, have a sexual relations and as a result, children. They have contradicted heir ideal. But they still insist on having an ideal. By adopting Little Father Time, Jude and Sue attempt to achieve a new ideal bond which is not based on a sexual relationship and blood relations, which is derived from sex, but a philanthropic ideal. However they pursue this ideal, so long as they have children who were born as a consequence of sex, they cannot escape from the contradiction. Therefore, they, are recognized as anomalous beings, and excluded from society by the presence of children and their lack of legal position. Little Father Time is quite sensitive to this fact. He thinks his presence and that of Jude and Sue's children, who were born by nature's law [sexual relations and sexual impulse] as the cause of their suffering and social exclusion which they have to endure. Thus, kills the children and then himself for Jude and Sue. This is the most disgusting scene in the novel. But his murder-suicide is derived from his love for his stepparents. Ironically, the ideal bond which Jude and Sue have always pursued is fulfilled at the hands of Little Father Time, the adopted child. He represents their ideals and thoughts. But his disgusting action exposes the risk of the ideal they have pursued: to negate the body and sexual emotion, and to have an ideal bond leads to the possibility of negating life itself, if taken to an extreme. The symbolical image of the bodiless ghost or images of death, which had appeared around Jude and Sue, metaphorically predict this possibility and risk.

Thus, while the images of ghosts and death indicate Jude and Sue's negative emotions for the body, it also indicates the negative aspect of their ideal and its danger. And moreover, the text of the novel, by showing the negative aspect within the pursuit of an ideal, and the intolerance of a society which could not accept their relationship and exclude them as an anomalous beings, seems to ask readers to consider what society and culture should be like.